

令和4年度 体験活動普及啓発事業
 家族DAY①～絵本で開こう世界の扉～



1. 目的

絵本の世界を実体験できる機会を作り、読書活動への興味関心を誘う自然体験の機会を提供する。
 親子のコミュニケーションを図る機会とする。

2. ねらい

- ①絵本の読み聞かせを通じて読書活動への興味関心を誘う
- ②絵本の世界を実体験できる体験活動を提供する
- ③親子のコミュニケーションを図る

3. 実施日

令和4年10月1日(土)～2日(日)

4. 対象者

小学生を含む親子

5. 参加者 / 募集定員

37名 / 40名
 (10家族)

6. 企画立案

本事業では、自然体験だけでなく、読書活動の機会を作るため、絵本に関する高度な知識、技能及び感性を備えた絵本の専門家である絵本専門士と事業の企画・立案段階から連携して進めることにした。

絵本専門士の野村富貴子氏の協力が得られることとなり、会場である当施設で事業趣旨やねらいの確認、活動内容の打合せを踏まえ、事業内容を設定していった。

野村氏からは、自然体験活動がより深い学びにつながるように各活動の冒頭で読み聞かせする絵本の選定や、より親子の読書活動を推進するためのプログラム内容の提案を受け、当施設からも、絵本に興味を持ってもらえる活動等を検討しながら、活動内容や活動の流れを決めていった。

7. プログラム (要約)
 スケジュール

主なスケジュール	
10/1 (土)	開会式 森を歩こう、ふしぎなものがし 夕食(食堂) 選択プログラム (絵本トーク・星空観察・たき火)
10/2 (日)	朝食(食堂) 絵本料理に挑戦! 閉会式 ※各活動の冒頭は、絵本読み聞かせを実施

開会式では、野村氏からSDGsについての理解を深めるため、子供用に分かりやすくSDGsに関する絵本の読み聞かせと読書活動の楽しさについて話をいただいた。

森林を歩く活動の前には、森や自然に関する関心を高められるように、葉っぱに関する絵本の読み聞かせを行い、当施設周辺の森及び曽爾高原の散策を行った。散策する中で、針葉樹や広葉樹の違いや曽爾高原についての話と葉っぱを用いたアクティビティを行い、最後に丸太のコースターを作った。



夜の選択プログラムでは、「絵本トーク・星空観察・たき火」の3つのプログラムを選択してもらうことを計画していたが、「どのプログラムも体験したい」との参加者からの要望が強く、時間を調整して3つのプログラム全てを実施した。

絵本トークでは、親子でどのように読書時間を楽しく過ごせるのか、絵本を選書するコツなどの話を交え、親自身も読書を楽しむことが大事、親が興味あることで子供との会話を楽しむとの話があった。また、読み聞かせした絵本と音楽とを組み合わせ、職員とボランティアとの楽器演奏も行った。

星空観察では、季節限定でライトアップされた曽爾高原を散策しながら、市街地ではあまり見られない満点の星空を眺め、最後のたき火タイムでは、少し肌寒い気候の中、たき火で温まりながら、ココアを飲みつつ、家族での時間を過ごした。



2日目は、絵本の世界を実体験できるよう絵本『からのパンやさん』を題材に、絵本に描かれていた様々なパンをヒントに、各自がオリジナルパンを作った。パン作りに必要な材料の他に、チーズやレーズン、チョコチップや魚肉ソーセージなど、多くのトッピング材料を準備し、家族で話し合いを行いながら自分だけのオリジナルパンを作った。

野村氏も、パン作り教室の講師を務めた経験を生かして、積極的に参加者にパン生地などの指導にあたっていただいた。

焼きあがったパンは、出来立てをすぐに実食してもらい、香ばしく焼きあがったパンのおいしさに感激している様子が見られた。



8. 参加者アンケートから

- いろいろな絵本の紹介をしていただいて、親子ともに楽しい時間が過ごせました。
- 普段一緒に本を読む機会があまりないので、読書活動の楽しさを感じられました。
- コロナ禍になって、他家族とキャンプに行くなどというのがほとんどなくなってしまったので、このような企画で、家族どうして活動することができて、とてもよい経験をすることができました。良い季節でもあるので、(今後は)お気に入りの絵本を持って、野外でレジャーシートを広げて絵本を読んだり、読み聞かせをしていただいたり、日常ではなかなかできない経験をしたいと思います。

9. まとめ

当初、読書活動は屋内で個々が行う活動であり、屋外での集団活動となる自然体験活動と組み合わせるのは非常に難しいと思いながら事業の企画を考え始めたが、絵本専門士の野村氏と企画検討を進める中で、「絵本で開こう世界の扉」というテーマが定まり、体験活動の取り掛かりとして読書活動を有効に活用することで、両活動の良さを生かし、参加者にも読書活動と自然体験活動の両方の魅力を伝えられたのではないかと考えている。

また、読書で高まった知的探究心をより深められるよう、自然も含め体験できる機会や場が身近にあることが大事で、青少年教育施設は身近に体験活動を提供する施設として存在する必要がある。そして、体験した感動や気持ちを共有する一番身近な存在として、親子のコミュニケーションを図る機会を今後も大切にしていきたいと、事業を通して感じた。

(主幹兼事業推進係長 松元 延行)

